



南總里見八犬傳

第九卷

三十二

曾
600
273



600
273

南總里見八犬傳第九輯卷之三十二

東都 曲亭主人編次

第百五十四回 憲重憲儀聚兵使を同くま 行包在村忠奸諫を異ふま



復説箕田馭蘭二根角谷中二元栗專作們的近村より来る莊客を以て斫
 仆し或は搦捕するもの有種並に穂北の里人の往方も知ざる一ひる日の功を
 怕れて隊の兵毎小下知し既死する近村見五六名と尚燃残る火の中へ一箇二
 箇投入さる。思ひの随焼く其首と皆斫合まる其頭小一口の大刃の燔
 刃わかれ是究竟の東西と首級と共に合持せし勝興三聲揚さる當晩
 五鼓の左側小五十子の城から来るが随即上るや臣等御高路を急いで穂
 北推寄さる。有種並に那里人們の世智介が搦捕されを知らず免れんとす

五箇

八犬傳九輯卷之三十二

縛られて相牽らざるを見る事堪ざらん何故ぞ。其妻兒子の前後も日を携
 へて粘り難哭へ其餘の谷中二門の去向を塞死冤と叫びて俱云云訴るを谷中
 二も耳中破けぞ眼も腫ら声苛辛。這奴們甚大胆に法度を怕れ上り蔑
 きて這罪人等と中途中奪界多く欲する向てもある有種。支黨なる疑ひ
 る。搦捕ねと吸れに従走卒奴隸を養ひぬと答へも果敢勢ひ悍く走り鬼て感
 蹴仆一毆に伏せ囚索被る開か中のみ餘る者れも作刀を抜見めりて多敷
 せと罵懲と權威勝りもる壯伎の脚疾に忽地激と逃去て非理非法は不
 遇の只老ると婦幼の結ねられて泣叫ぶを追立々々新舊共忍固の城へ牽
 りて死囚牢に入れらる。信而根角谷中二の次の日穴栗專作と五十子の
 城へあつて昨日又中途中。有種が支黨と多く搦捕ひを其文名を任進を皆
 是筋を証言多と定正成りて竟悟る連の功ありと譽て猶その後心を

子。追捕の憚るべからんと旋々專作を還されり然件の邑人們一びるに二
 びるに非法の緝捕の良人を殺され兄弟牢舎敷殺れり怨む其冤を又訴ま
 欲まれも先度懲りて果に陰謀致し心ある足丈不東八州の管領の盾衝く
 術のあざれ打歡くの猶餘殃の這一御の係ぬを幸せりて中々思返りて黙止
 け。現乱世とらぬ上法の守るる下死怨の遣る方今倘やも孔子の又春
 秋を為せん欲と識者の嗟嘆不堪きけり介程の扇谷修理大夫定正憎と思ひ
 道節信乃も野等の八犬士の存所及何鯉の政木孝嗣ののまでも今番詳に知
 べき。怨心不堪され左も右も尋思を多。稍思ひるはあれ素らる當家は屬城
 る。大塚へ使者を遣りて城主大石見守憲重其子源左衛門尉憲後父子と
 五十子の城へ招れよと兩室を面談去當時扇谷山内兩管領の四個の大夫
 の。長尾大石小幡白石是を管領の家四老とを又持資入道道灌あ

長尾景春と共に扇谷の大夫之因て長尾御田内管領と唱さる中
 小幡白石の山内顯定の家臣より長尾も素是山内の家の元老なり小景春
 年来顯定と不和の故に遂に定正を屬れども又叛いて獨立の志あり定正を
 後悔して君臣の和順既成るの如く景春は今尚上野白井に在城して
 十子又出仕せざる又持資入道瀧の文武の達人當家の軍師忠誠稀る良臣を
 定正の仍所多道不違ふの故に屢是を諫る野水舟横りて言竟不答らざる
 諛者の為身亦危く伍子定日眼を東門に掛け屈原漢父の辭を為し心小
 似る時やあれ竟病着不假托て其子新六郎助友と俱不相摸の糟谷の城に
 在り忠魂義胆移るあわねど執刀かくの如くあるべし久しく出仕せざりけり
 間話休
 題然又定正の日大石憲重憲儀宿恨の方方事顛末と告て
 謀ある如く如く那道節信乃毛野們的八犬氏の當家の怨敵刑餘の乱賊罪死を

休

容ざる者多小里見義成是を扶持て敢隣國の好と思を又我舊臣河鯉孝嗣の怨
 言不忠の罪ありとて是を死刑にせんとする折亦那惡犬氏の一人也大江親兵衛仁
 喚做せ兇少年が神出鬼没の幻術あり其日の実檢使根角谷中二麗麻呂と思
 考則孝嗣とて上總へ走りて里見の與小戰功あり其後孝嗣に結城を早瀬の川
 陥りて死しとも思え或は恙ありともいふ其の日の日穗北の御士落鮎餘之七有種
 老僕世智介と喚做を奴と擯捕りける并が招き事發覺れ且有種も亦惡八犬此
 支黨より呼ばせり緝捕の士卒と遣せり穗北の賊民皆自焼いて逃亡り死
 きて宗徒の屍骸ありといへも燔首を分明らかに約莫かくの如く惡黨の我
 封内不横行を隙と視ひ虚を施し年来里見の間者お做りて我を冠せり暴行機
 變は皆義成が使ふ所問きて知るべし抑義成の父里見義実の素是嘉吉の亡
 人より小安房へ流寓りしより山下定包を討滅して神餘の迹を横領し満呂安

西之欺殺して四郡之併吞を以て義成も亦奸雄也其箕求衣と兼し上總之海
 志下總までも已半圍併吞し尚飽と知ざる欲敢當家と謀らむ先を奪はんと欲し
 人を征し後を征せんと欲する今倘斧鉞を用ひて竟に子孫の患ひを做さんと欲す
 我孤力も一朝本意を遂げざるは於是再思惟る山内頭定は是同宗の管領也
 譬言の車の両輪の如し然ると不合のありて一旦確執不及じら親族及て雙言敵の
 思ひを做せんと欲する年あは是より以來我威徳左の右不如意をて叛く者回れり過て
 改む憚ると勿れといふ先頭定と和睦して両家魚水の思ひを做さ當家の武威
 復振て國の八州の大小名頭と舉て我下風を立んと願ふれば我と頭定兩大将を
 従ふ諸侯勇士を率て里見と一擧討滅し憎しと累悪大氏と一個漏さ生拘
 下八創の做まらば豈快らば我主張の只是の意見もあはばまらば勢の猛
 く談され憲重頭と低く其子憲儀と侶共听果て答るや誠以て君の御

せい
 せい

賢慮山内殿と御和睦の一説を臣等も豫廢發所當家愈御般昌の其本中
 此れと祝其憲儀の亦多し目今兼りて西管領の御連署あり諸侯を催使做
 事の八州の列侯誰も亦敢不の字の者も先を争さ安房上總多五十餘城を
 立地而降さん石と鶏卵の厭するも易く下憎む那悪大士も獲雄多就中大阪毛
 野の鮮目御前の怨敵又大山道節の我君と射なり且臣等も老黨仁田山晋吾と悽
 殺去し怨あり矧又犬塚信乃の當城へ乱入して人を屠る粟と竊と刺辟書して辱
 めなりける狡猾憎む餘りあり今番里見と御征伐の御催の宜定の當然と孰
 金名の軍とらん早く鎌倉御使を仰付させぬか否の是豈要るべしと相槌打
 いそがせ定正快然とら領定既各同意を敢三思不及ふ石見の明目鎌
 倉へ赴き宜く頭定と談せし頭定我と同意して俱に里見と伐んとし甲斐の武田
 相模の三浦の招きをも來會せん他近國の諸大名石濱の千葉自胤の素より

當家の躬方へ又下總の千葉孝胤及結城成朝常陸の左武高入鹿嶋又併我の
 御所成氏主上野の長尾景春へ源左衛門儀廻勤して合戦の事と談ぎし。頭定合體
 たんが併我の御所も恨と思ひて必や従れん。又越後片貝の能大刀自の女流るれども義
 勇あり且故夫人蟹目前の母も亦の事と告ぎ恨まれん片貝並白井の箕田駿蘭
 二と遣さん。の事を先とあるてよと言送もろく宣示せ。憲重憲儀言兼して俱小
 大塚の城へ退りけ。倭而る次の日大石石見守憲重伴當より従へ鎌倉へ赴
 程の口一宿で第二日の朝巳牌時候山内管領頭定の郎不造りて那家此權
 臣多齋藤五兵衛佐高実の對面を請て那議を云云と告て公等。宣奉君。の情
 願別義あむ。一旗不和の家门の恥へ當館。合體あふ。今より其を合し力。勤
 志俱小里見と討滅して且悪八大土と虜め其宿怨復せ。安房上總と等分。の
 込小數郡を加領せん。の事御同意せん。近國諸侯の大軍と合して征伐をいそべ。

修理大夫を以ての意東の如く。宜く仰上げぬ。と詞を低く。利誘ふ。辨論詳らう
 於高実都てあるて。躬退りて。奥の赴け。則主の頭定小扇谷殿の使者大石
 憲重口状に固様々と。那意を具告。頭定是をちて。先高実の意見を
 向來高実答て。然し小扇谷殿當家小叛。軍威振。諸侯離。只
 管領の名ある。の管領の威勢。然り。里見を恨る。為干戈を動。欲され。自
 力及びび。詞を低く。礼を篤。當家の資助。馮心。其利。及當
 家の存。今其和睦を。饒。合戦。俱小里見を。滅。兵權。愈當家小歸。
 起さん。臥せんと。館の隨意。多。引。吉事。多。早。脚和睦。あれ。と
 且耳。且。踴。頭定。連。の。ち。點。頭。其。謀。我。思。所。と。相。同。然。憲。重。對。面
 せん。先。其。准。備。を。い。ね。高。実。飲。美。又。客。房。へ。赴。け。苟。早。て。頭。定。の。礼。服。を
 装。ひ。近。習。を。従。て。正。廳。へ。入。り。上。坐。著。せ。老。黨。弱。黨。齊。々。と。左。右。二。側。へ



侍り。登時齋藤左兵衛佐高実大石見守憲重は案内を引きて主君の
 参入に顕定則坐を賜ふ。憲重は答る。既に高実を引きて修理殿
 定正の来意別議す。両家和睦の美を我願ふ所。且里見義成を征伐するも其謂也。
 両家合體。且近國の諸侯を率て俱に里見と討滅さる。遂に北條長良も宛城
 脱て陣門の降を乞ふ。八州平治して永く同宗の親と失せ。欽び是の優をある
 ん。我近死日六御も出陣して那川の上を。俱に誓て異論する。則五十子の城に
 入て諸隊の軍配を定む。罷歸して是等の美を宜く修理殿に傳へて。大義はこ
 とと勞も親名刀一口を憲重に取し。其後御食饌を薦め。伴の士卒に至
 るまで山海の珍味をり。酒飯の儲け干らぬ。憲重主僕欽びて俱に拜
 謝し。歌舎を退り。次の日帰路を赴く程。又一宿中。第二日早く五十五城の
 か。隨即主君定正不見。参りて山内殿の心答箇様々々と和睦同意の

事及両家合體の旗幟と。諸侯を連ねて水陸より里見義成を伐んと云會盟
 更の餘の所要も儘々と漏れ。反命を語次。然り。那里の款待の厚。則憲
 重を勞ひ。大塚の城へ返り。其後又石濱の千葉下總の千葉時義の城氏結城の
 成朝へ大石源左衛門尉憲儀を使者として里見征伐の美を告知する。定正顯
 定。兩管領の連署と。軍兵を催促す。又常陸の左武鹿嶋白井の長尾精
 谷の御田片貝の服へ箕田取蘭と有功の老黨を使と。出陣を促す。
 甚急を中。長尾御田服大刀自。扇谷に従事の大夫妻。或は定正の故夫人。蟹
 目の母。違背ある。又石濱の千葉素自。扇谷の封内。廣く。且扇谷の
 管領。附庸の小諸侯。大坂毛野。大田小文吾の。あれ。今那虎の威を借る。
 舊羞を雪んと思ふ。欽びて其催促に従ひ。又甲斐の武田信昌。相模の三浦

上杉右京亮足利
成氏
の時録
管領の執
権者

義同へ願定より相徇らる。然れども、この諸侯は北條長氏の厭まらる城と離さく。遠く来會き、或は嫡子或は親族の武功ある者大將として士卒を進むべし。と制度せられ、單爵我の足利成氏、其扇谷山内の両管領、其舊怨あり。嘉吉のむく。結城落城の後成氏の兩兄、春王君安王君の擒とありて、無井の金蓮寺に害せられ、成氏のみ恙ありて、忠義の舊臣、其拍養せられて世に潜びて在せし。長尾入道尚賢の心が執立まらざる。録倉の居たり、京都將軍願ひ、京亮。成氏を関東の管領と仰せられ、成氏父兄の怨、其堪む。情地、其近臣と謀て、上杉憲忠と敷捕り、上杉の族起り、成氏を攻て、録倉を追はれ、且成氏の乱政を室町殿、其朝意、京亮。則成氏を解官せ、上杉房頭、其父を関東の管領、成され、是より成氏、爵我の城、在り、屋敷、上杉。定正と戦て、録倉、其入り、其欲され、其勢、其微、其て、竟、其果、其。刺、其文明、其四年、其至、其。願、其定、其

京

成氏を攻伐す。爵我の城を拔た、成氏、則千葉、其走りて、千葉陸奥守康胤を憑て居り、信而文明九年、十年、成氏、其爵我の城、其入り、其。今、其至りて、願定と和睦して、陽、其周、其秦、其差別、其有、其似、其れ、其も、其送、其怨、其を、其解、其く、其由、其れ、其定、其正、其亦成氏と快らむ、俱、其胡、其越、其の、其思、其ひ、其を、其做、其して、其事、其訪、其ふ、其も、其あ、其ふ、其ら、其り、其然、其ハ、其大、其石、其害、其儀、其是。其の事、其顛、其末、其より、其知、其れ、其が、其占、其て、其今、其番、其の一、其美、其い、其わ、其ん、其心、其許、其る、其思、其め、其ら、其却。已、其死、其あ、其る、其れ、其伴、其當、其り、其従、其へ、其則、其爵、其我、其小、其赴、其り、其那、其脚、其所、其の、其權、其臣、其と、其ま、其え、其る、其横、其堀、其史。在、其村、其の、其對、其面、其を、其請、其ふ、其里、其見、其を、其征、其伐、其の一、其議、其を、其告、其る、其小、其定、其正、其の、其宿、其怨、其箇、其様、其々、其と、其八、其犬、其士、其の。事、其落、其鮎、其有、其種、其の、其事、其及、其河、其鯉、其孝、其嗣、其の、其事、其生、其都、其里、其見、其を、其非、其理、其と、其証、其且、其誘、其ふ、其利、其を。以、其其、其言、其果、其て、其又、其の、其空、其の、其の、其美、其脚、其所、其の、其御、其同意、其を、其俱、其小、其御、其旗、其を、其拔、其め、其る、其德、其大、其將、其小、其仰、其せ。其も、其凱、其旋、其の後、其録、其倉、其返、其居、其なり、其ん、其の、其美、其定、其正、其心、其單、其を、其敢、其約、其束、其仕、其る、其ふ、其成。

八代傳九郎

九

文

顕定も亦同意を連署の誓文の存在の美を以て御執成と請なる
 と町寧は來意を告ぐ件を連署と連署と在村答て示談の趣ある
 侍の後刻官君が上へて権且歇舎を退治して御答を俟候と云言尊大権
 貴を示其憲儀則謹諾て歇店退る路の次又在村の宿所にて土産代と録
 ある黄白二裏と老僕を遣與して在村の贈りけり信而横堀史在村の件の一
 美を同僚する老黨甲乙の告知ら次の日早成氏の正廳小出の及び在
 村則告票以て昨日扇谷定正主ら來使あり其使者大石憲儀が口状箇
 様々と言の顛末と定正顯定の連署とせし軍兵催促の檄文と
 此言書と見せしめたる成氏疑惑の眉を頻擧げ在村等仰告や那顯定定
 正は近屬我と和睦して權且金異小似れ他等不忿や君臣の礼と云
 介る今も他等と幫助て怨も有る里見義成を攻伐の義を連署下汝等思

定正山内顯定の當家舊臣の子孫を奪ひ地を畧す我君累世の冤家の
 奪奪と返すも近頃の亦當城を攻落して根を断葉を枯す欲するも有
 敵系小官言と思の故欲稍當城の返すも一の猶胡越え異なるなり定正今
 里見を恨るやあて攻伐も欲されども他が孤力小克む先顯定と和睦して且合
 縦連衡の古轍縁諸侯を連てて素懐を遂ますの故大石憲儀
 等と説客ふて我を喫する大利をせり是豈他等が実情のや况這軍兵
 催促の檄文の我君も一編小一城の主と一列の思ふ欲其非礼大不敬是も甚
 是のや此は是の似るべし里見氏の祖季基春王安王君の親與結城

憲実の
上杉憲
基の子
杉安房
是又清
方を憲
實の弟
上杉憲
基の子
杉安房
是又清
方を憲
實の弟

落城の日戦致を忠義の今美談と其子義實安房走りて遂に其基を
許より以来今義成の時も年始の必使者とあるを父祖の舊義を失は
然りと今故を寛家と帮助て舊義の里見を伐つべしと云ふは尚已と
安房へ加勢の軍兵を遣さるるやと憚る所も諫るを在村急推禁めて主君
朝に稟せり目今行包の意見の如しの其理あるに似ていども臣等も愚
先君永亨の御滅亡を恐れ自ら業自得之上杉氏の罪あり又吉
吉の役の京都將軍の御下知恵憲実清方の本意ありとて長尾尚賢
君と立て鎌倉の主の御成り一則是舊悪を償んとする君の受を思召
及て憲忠と害ありは君臣亦復讎言とて今日に至り一則正里見を憎むの所
以則頭定と和睦合體して君を請ふて惣大将の御成り共侶の里見と討
欲しは是當家の大幸と今自他の勢いとて其雌雄を計りは義成愚將の

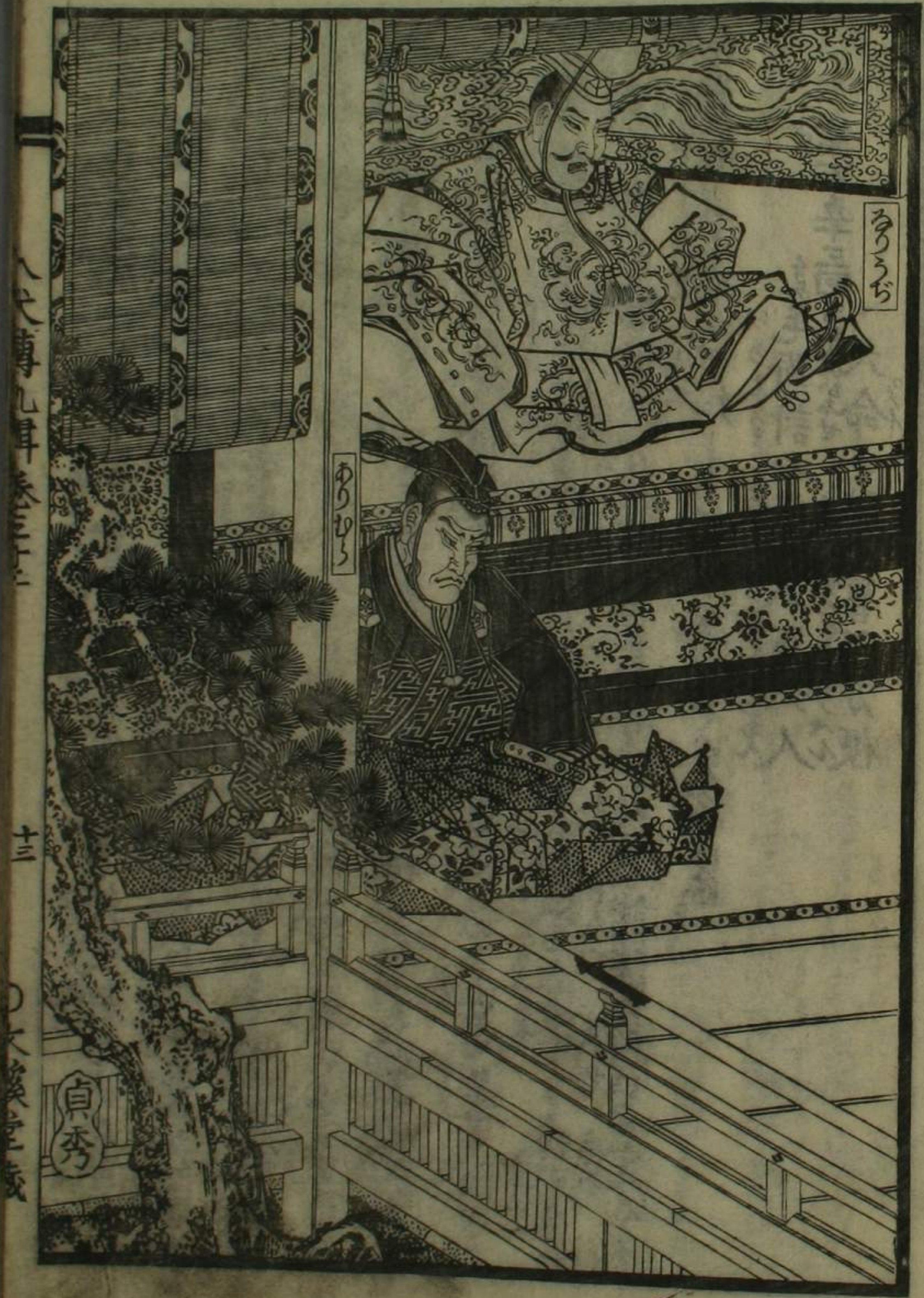
年終城へ
計りは
本義
定正の
方の子
と從父
兄

わらふとも僅に房總の弱兵をり八州勁勇の大兵を防いで勝りいんや他
滅亡の期不在り今定正頭定の荷擔すく俱に里見を滅しは當
家の大利則其第一定正頭定先約あり必君と鎌倉へ還入れなり大
職を譲りまわす一其第二當家の士卒戦功あり其恩賞を安房四郡と
御領に御成ると仰せらるる定正も其折辭いりしとて其第二の六松已前
犬塚信乃と喚做を魁見村兩九の大刀とて當家舊臣の見孫と云證據あり
仕を願ひて推参する其村兩の贖物とて其奴實の振舞陽に相似る敵の刺客
を日れ捕捕せし思ふ倍する煨煉して找む力士を欣伏せ芳流閣へ逃
登りて往方の知事あり約莫當時の爲体の君の知召を所之又當家御成
る日大飼見八を素是走卒見兵衛と頼見より一撃を劍白打捕捕の格を
よ做せり御執立あり御成され那奴其職を嫌ひ稟して久くわらふ

史

勤不跡を刺誹謗の戲言と吐くと少くも捕へ牢舎在りて大塚信乃を
 緝捕の與に一日罪を饒されて芳流閣上の登せし及信乃を擱り捕を俱
 命して往方を知を其後信乃の行徳の客店小病臥て在りと少くも折
 討隊の頭人を奉りける新織帆大丈明風が殿兵を領て那地におん信乃が
 首捕てかゝるも実檢入れひたの首も亦君の知召を所へある信乃が猶死
 るも亦那大銅見八等火家の少人七八名比目大をりて氏と做を者と俱重見
 義成の仕々寵用せらるると云ふの是の今番大石憲儀が口状也。摩て少知
 り以然定正主の里見を憎と征伐の事の始の今茲の春那信乃見八等の
 悪八犬氏が五十子の城小乱入せ折定正の内室の刃伏けに怨れ由れ是れ
 情由のへ君扇谷殿と共侶義成を討滅し玉ひて信乃見八等の悪八犬氏を
 皆生拘を罪と糾き。誠り梟て世の人示しぬ賞四訓正く最愉快の事

るれ那兩大将感謝の堪ぞ俱之恩義を拜戴して復奥の八州の連師と仰
 たり然れが這三の大利あり。介を仍包ぐとも思ふ生仁義を感せぬ。里
 見不加勢あるる當家の士卒勇も不勇も信乃見八等の悪八犬氏と肩を
 比下風お立て世の胡慮あるるの義成當家の冠せをといふ。連年の闘
 戦一度も援兵をせあるる荒年の中兵糧を調なりのひに信乃見八等を
 たまふも誰り君を不義とく。何ふ此首を容る者ひんや。當家の興廢その
 與本在り義成脚加勢の物体るるといふれと便佞巧小説薦れ成氏遂に
 ら惑ひて敢是非の再議及ぶ然るる憲儀小對面して同意のより示さんそ
 次日憲儀を召し成氏則對面の折在村をりて答るる。扇谷山内兩所よ
 り言來され。里見義成征伐の事我も亦大塚信乃をも憎と思ふ。よる素
 より欲する所も委曲の五十子の城小邊るの目面談を聲えんと同意の外異議



八十八年七月廿一日

十三

自秀

しんし

ゆり



八十九年七月廿三日

自秀

正廳み成氏
両家臣の意
を問ふ

志

ゆり

ゆり

十四

るる一々憲儀の缺々来會の目を契りて退き結城へ赴けり成朝の思ふよりやありけん封内不治の事ありと辨せ催促に従ふる他千葉宗胤も近曾老母世を去り猶喪中在る故に陣克ふべきと云ふも亦催促に従ふ又常陸の左武高久鹿島の同意の答ありて期速びて來會せむ其志人の下風を立んと恥る然れども義成の良將たるを以て事の成敗量難く各口その封疆を守りて遠く勝負を覘ふの山あり附ざりけり有憊れども定正の躬方の軍兵數萬あり戰飯も亦医しつゝ不參の諸侯を物とも思ふ近日常諸將の集合を待て諸隊の攻口を定んとす老黨有司士卒下知し其の準備をぞのせしめ

第百五十二回 毛野計を呈る八百八人 大命を聴く善巧方便

ど

却説の日里見の間謀見武藏より來て注進の言の顛末右の如く詳みり且蓋せる事あるを其大要を記し義成是を以て忠告の亟るを言町守の言を以て恩賞の異日あり且相共休し七亦復那地あり思命使くしければ間謀見の執り拜して庭門より退出ける當下義成王の次の間侍りる辰相清澄を召させ義成及びの程小御曹司の權野を還らせり義成主うち合笑くその便宜ありて義成の疲勞する状對面を以てあはれども但七個の天士等目今急所要あり櫛衣裳の終るその聊の厭はれは皆疾召ねといふ事あり近習を走らせり姑且七信乃毛野道節社人大角小文吾現八等早く衣裳を更衣杉倉直元と共侶の義通君も從あり見參入りて義通の恭しく父君の朝顔と稱して義成を祝ふ義成主の愛を以て歡びの詞ありて是へくとす義成も亦七

犬士と直元等も人馬の調煉稍果て。目今から来りける休らせもせ。急速の面
 談不及の疲勞を思ひさる。似たる。這里より方僅豫武藏の方遣。間謀
 見せり。五十子も歸來。注進の軍情も。告す。思ふ。急ぎ。招き
 なる。敵地の動靜。飲と。回れて。小文吾先。然。是。義。中。京。上。一。那。市
 河。大。江。屋。依。介。注。進。の。進。め。も。快。船。も。走。走。し。て。昨。日。妙。真。許。来。て。臣。等。諸
 い。の。旨。も。皆。共。侶。無。々。の。地。方。在。り。と。知。り。馳。獵。所。も。尋。求。信。乃。現。公
 六。個。の。義。兄。弟。も。對。面。も。情。地。も。告。げ。扇。谷。管。領。の。事。の。趣。諸。侯。を。連。ね。水
 陸。も。當。家。と。伐。り。欲。ま。い。其。言。極。く。具。も。疑。へ。も。折。り。人。馬。調
 煉。の。競。獵。も。昨。日。果。も。果。一。の。依。介。の。猶。御。用。も。あ。ん。妙。真。許。止。宿。も。御。沙
 汰。を。待。た。し。て。留。り。以。て。告。げ。信。乃。現。八。も。亦。の。事。那。依。介。の。長。も。行。徳。の。旅
 宿。も。比。も。相。識。れ。も。老。實。見。せ。い。と。も。毛。野。道。節。莊。八。大。角。等。と。商。量。分

い。の。則。毛。野。が。一。策。あり。申。召。る。べ。う。の。と。薦。書。せ。義。成。王。然。も。と。點。頭。て
 原。來。定。正。の。謀。る。所。を。各。既。も。知。り。然。も。詞。を。費。ま。及。び。毛。野。の。何。等。の。筆
 計。も。具。も。教。も。多。く。は。と。向。て。毛。野。の。阿。と。成。り。找。し。出。聲。を。低。う。し。と。否。思。意。の
 別。議。の。定。正。王。海。陸。も。當。家。と。攻。伐。も。欲。ま。る。必。ず。船。と。徴。也。水。戦。の
 船。も。陸。戰。の。馬。も。勝。れ。敵。も。船。も。合。れ。ぬ。以。前。も。早。く。依。介。の。仰。付。を。あ。ひ。て
 武。藏。下。總。不。在。の。小。船。も。買。合。せ。御。領。の。海。岸。も。維。持。措。敵。の。與。わ。り
 不。便。也。時。は。莅。て。御。方。の。利。あり。或。亦。市。河。邊。に。其。船。を。沈。め。隱。置。後。不。用。と
 い。の。願。も。早。く。依。介。の。船。の。價。を。賜。り。て。の。義。を。せ。ま。ひ。と。請。ふ。義。成。王。ら
 等。現。も。急。ぎ。良。策。に。六。郎。兵。庫。助。の。且。退。り。て。有。司。下。知。し。船。の。價。も。小。文。吾
 等。不。速。與。也。の。餘。も。所。要。の。猶。い。そ。當。國。並。上。總。下。總。も。城。王。諸。頭。人
 等。必。ず。連。署。の。急。遞。脚。を。て。那。敵。必。寄。多。事。由。を。御。示。て。海。濱。の

成りて固く其下。を中堀内雜魚太郎小森但一郎浦安牛助登桐山八郎田税力
 助等の水陸の軍陣の孰も孰も者も別角の所あり各今守る所の廳南千代九椎
 津館山の諸城の權且次將小讓り衛らる。那身の皆稻村へ参りねと下知まし。あ
 餘の明日の制度のあらん。急ぐ只這二橋事のこと。詞本を課され辰相清澄を
 る果て却七武士を勞ひし船の價の多寡のも。後日向を契らる。ち連立を退出
 け。登時又義成主の七武士をち向ひて。目今毛野を算計の我既不用ひ。その他亦
 浪策の教と受ん甚麼を。と問ひ詞も訖らぬ程の道節杖と出て稟言
 傳聞ふ。今番扇谷定正ま。當家と恨も水陸の大軍を起し其監賜の
 今茲正月廿一日に臣等が五十子の城を攻落して先王先父の讎言を復し。那人
 憎も且差して事今ある既果と云依ひ忠告を。夙く其を。あつは是臣
 等故恨と隣國を結せ。其禍を君の徒を罪免るべのみ。然らば義兄弟等

と相共骨を折り身と粉ふるま。水大敵と殺論ゆ陸の寄隊を。血ふく。
 上。我兩館の洪恩を報ひさるべく。下の房總二州の民の塗炭を極む。素素より臣
 等の職分也。他を譲らる。所るれども人各ゆると。あつは天謀と帷幕の内
 旋りて勝を千里の外に決まら。智あわれ。あつは又堅を推し。銳を折し。勝を
 未然に決せ。戦へ必勝。且大敵と怕れ。士卒と虎の像く。做せ。是大勇の
 あつは。敢む。易く。願ふ。今の算計の毛野。向せ。臣等六名。其計の据て
 り。敵を破る。何の御疑ひ。死と憚る。処も。論。莊小大角小文吾現八。も
 共。あの議を好。て。毛野を軍師。做す。欲。と。詞。赤月。請。稟。毛野。の。意。か
 推。禁。示。て。開。何。を。の。や。兵。法。七。書。の。各。も。又。学。ぶ。足。る。者。も。夫。愚。而。て。用
 ひ。られ。ん。と。好。も。賤。く。て。專。せ。欲。ま。る。聖。者。の。誠。る。所。我。玉。智。字。を。い。れ。れ。も。然
 ら。る。智。者。の。徳。を。今。も。亦。各。と。進。退。を。俱。せ。ん。一。人。不。任。ま。る。と。辭。を。信。乃。

咳に制めり大阪辞讓の不忠不似より。智本勝者の仁るれも親兵衛いも遠く
ね。今日の御用立立より。然る我々今和殿を薦めて。軍師不倣く欲まを。則
館の御為と和殿も衆請の宜に後て。辭計を献る。則館の御為と
美をゆるめ給と解れて毛野の黙然と困りて又より。當下義成主との
同答の理るる。ゆり斜る。道節もふち向て各一致の忠信薦舉の思
ふ倍で最愛。我始より毛野を。軍師不倣く思ひかども他。年尚二十
足る。這六太士の弟を。萬一媚く思れて言ひれざる。救ふ介意して
ま。この美不置。各反て他。薦め。其計の馮心と云大取度。あつら
才を媚も。能を己心。英雄雙立者。あらん。我。かの如。八個の賢臣あり。定
正數萬の勁兵あり。一時の鳥合也。五侯鯖。似るべ。伐破る難く下
信乃道節。莊介大角小文吾現八を。防禦使せん。各

辭ふ。命の七太士。俱し身を退り。額を衝く。齊く言美と宣
あ。側聞。直元。心惜地。感て。己。現。君。臣。思。不。欲。ひ
堪。俱。千。歳。と。祝。け。倭。又。義。成。主。毛。野。を。身。邊。近。く。找。せ。軍。師。
逆。敵。と。料。り。必。欲。き。あ。ん。其。甚。麼。と。叮。寧。り。同。答。て。然。り。敵。の。陸
地。と。宗。と。必。近。を。食。り。水。路。を。徑。安。房。上。總。へ。渡。り。早。く。當。城。を。捕
謀。る。者。多。し。陸。行。德。園。府。基。這。而。然。所。敵。を。引。き。奇。兵。を。り
其。破。り。易。り。水。路。の。伏。兵。を。用。る。隈。も。然。り。居。り。大。敵。を。俟。べ。ら
必。勝。べ。死。計。策。の。口。八。百。八。人。を。よ。く。用。る。ふ。あ。れ。の。血。の。做。か。あ。る。を
よ。く。行。る。者。の。這。個。大。村。大。角。と。大。法。師。あ。り。こ。の。他。猶。一。兩。人。を。て
ま。死。の。機。臨。て。稟。上。人。余。ふ。大。師。の。前。月。より。風。寒。の。恙。あり。久。く
病。牀。を。出。り。一。兩。二。日。己。前。より。痊。可。を。ぬ。り。と。言。ふ。召。さ。必。參

八代傳心昇卷三十二 十七

るべし。そなたは先是の事と云ふ義成主點頭て其美、大と大角のりち
ろゆる。八百八人との何ちあらん敵の大軍を蒐逆ん八百八人其甚寡
老憶ふ人数のりあわら。信乃大角の文字に富ら思ひひる飲いふを道
即壯小文吾現八是を知らや甚麻をを向れて大家阿とる。応て
亟多解治るける。中道即卒然と焦燥て噫大阪を迂遠る。信折小
坐真か死謎語をのてよと疾る半ねと急るを義成主推禁也然いひ
道節計の密山多と好とを何曹々々亦以あり我の考へん各も考へて解治
たふ明日報け。我又憶ふ。定正顕定合體して諸方の軍兵を集る。催
促太急るるとも日と累ねぬいふ。水陸共全を以ん然と閑戦の必
十二月の初旬不在ん然とて由断まを大士等の當城止宿して明日ら夙めて
衆議廳に参集ね延命寺へ今日使を遣して、大を召バ明日へ参つべし。又武

者助の明日朝早夫馬を龍田へ走りて這椿事と老館に告る。ね汝が親
木曾介及堀内藏人の老衰起居の勝とやぬ。今あのを知らん然と
苦勞の思ふべけれ我幸い八八士あり。又辰相清澄等の良臣あり且勇士亦匿る
を致仕の老人枕を高くも凱旋の日を俟べと。信乃慰め義通を疲
勞れしめ卒々俱して退りねと仰ふ義通も坐と退ら。父君の執心を
舒て立ぬ。七犬士の杉倉直元と俱し言義と御曹司の相従て退り。
信而其詰朝義成の両家老東六郎辰相荒川兵庫助清澄以下の兵
頭に従へ。夙く衆議廳にお出ぬ。七犬士も相俱り召れて其席に在り。當下小
文吾信乃現八昨日命せられ大江屋依介賣合も死船の價の敷の
よく他も遽與して今朝市河へ還ける。と云え上は却昨日毛野のり。八百
八人の美小速が信乃と大角と莊介稍解治ると云。又道即と現八小文吾の

大角の事
大角の事
大角の事

八人の二言と悟ゆるもの八百の言と詳るるを公義成主ら合衆て我亦當
 るや違ふ後知ねども辛くと思ひしる各且の事と俱に寫し合て見ん
 料紙硯のあつたのさくといそぐて君臣各書寫あしち合て俱に身を見し道
 節現八小文吾の只火の一字と寫し又義成主と信乃大角莊小を是則
 眉火の二字と道節これをそ眉と類單めて八人を合ま火八字と論る
 風を八小従ひ虫は従ふ故虫を八日あり其卯字と王元の論衡の
 介ると八百の風といふをそと難され信乃がの風八小従ひ虫は従ふ勿
 論るら古文の亦風作りて八小従ひ百小従ふ者漢人の隸書在り必
 疑ひる處べと解れ道節感服して現八小文吾共侶及びとと思ひける是を
 見もあつたの辰相清澄の自ら自餘の諸臣の感して已む程の義
 成主の憶もあつた笑れと毛野を喚被て軍師乍麼眉火の二字の當ら

らむ是中我又悟るとあり異義の那妙椿裡兒が八百比丘尼と自稱する這八
 百も亦眉之他の雍龍襲の玉とて風と自由の起る風裡のそあつた今中
 なる悟りあり鮮示のあつた毛野が心と共侶の大家奇と稱ける登時又毛野
 がのそ那雍龍襲の玉の八百八人の計策必是用ふ死要際示の東西のい
 とあつたと思ひし御意のあつた事の成る死非をその件玉を今も
 る不藏めさせある飲、大師の参り計策と説きと折遊與させ多か
 りを義成主らちて那玉の今もあつた合衆て易けれども、大の來會せうも
 あつた其故の昨日使を延命寺遣して、大の徳々のせしめ、大の辨ひで且の
 中、言不敬ふいへも野衲佛門の入りも未嘗五戒を破ら然と何を出家
 人の相忘らぬ軍陣殺伐の高量席より口れて養るべ耳のひも且賤恙瘥
 可も髪を剃らぬといへども、鬚鬚を剃ら頭顱を削ら其美の御免と被下

八人傳年卷三十一
 九

と云強面は答をす。侍れ別人を用ひん。彼と向ふ。毛野の守を。否御説。ひ
 へども。那師父と大角。その袖策を。仍ひ。其故。箇様々。信々。言詳。不
 耳。其生。其義成。王欽。以て。又使を遣。て。促。迫。迎。ん。然。否。那師父。の木
 訥。事。より。君命。中。従。る。所。あり。殺。生。戰。争。即。是。臣。等。御。使。と。今
 大角。と。共。侶。延。命。寺。不。赴。於。説。る。兼。服。仕。ん。猶。幸。ひ。多。那師父。久。病
 着。也。髯。も。頭。髪。も。長。く。伸。て。面。瘦。て。し。ひ。ひ。の。あ。る。敵。を。計。る。妙。大角。の
 拙。策。を。既。示。し。ひ。早。く。准。備。仕。り。ぬ。身。の。暇。を。ぬ。ぬ。敵。の。大。兵。五。十。子。集
 合。ぬ。前。師。父。と。共。夜。紛。れ。快。船。不。乗。せ。敵。地。遣。さ。べ。雍。尾。襲。の。玉。を
 賜。さ。し。と。急。迫。請。へ。大角。も。毛野。計。策。を。好。と。稱。て。俱。不。然。と。稟。さ。し。を。
 義。成。則。そ。の。説。不。儘。て。雍。龍。襲。の。王。と。遊。與。ん。と。そ。の。義。成。清。澄。不。尋。ぬ。
 清。澄。答。也。然。し。以。件。の。奇。王。の。曩。大。江。親。兵。衛。が。稟。さ。し。あ。る。臣。も。預

す。なり。一。か。二。と。ぬ。る。寶。不。は。れ。大。士。等。が。那。八。箇。の。靈。王。不。擬。へ。且。失。ひ。ら。え
 為。ぬ。毎。腰。不。吊。て。ひ。今。も。あ。ふ。ひ。の。ひ。躬。て。腰。を。撈。り。て。表。裏。を。解。く。進
 ら。ま。れ。義。成。受。命。の。見。て。隨。毛。野。不。渡。一。之。毛。野。の。ち。戴。冠。は。懷。不
 楚。と。夾。め。大角。と。共。侶。不。退。り。立。ん。と。て。辰。相。急。不。喚。く。け。大。阪。生。御。使
 不。延。命。寺。赴。か。伴。當。の。准。備。を。ま。せん。騎。馬。多。路。次。を。い。そ。る。ん。と。心。つ。れ。か
 毛。野。答。て。否。思。ふ。ゆ。ひ。伴。當。不。死。に。反。て。多。騎。馬。を。も。て。悄。地。不。然。と
 い。ひ。此。下。退。死。て。却。君。侯。と。義。兄。弟。も。別。を。告。て。大角。と。俱。不。延。命。寺。へ。と
 立。ふ。け。り。姑。且。て。辰。相。の。清。澄。不。尋。ぬ。寔。不。大。士。の。奇。才。今。の。い。ん。の。言。ゆ。り
 也。これ。就。中。大。阪。が。八。百。八。十。人。も。至。妙。也。但。今。番。の。水。戰。を。唐。山。三。國。の。時。吳
 魏。赤。壁。の。故。轍。不。據。り。風。と。火。を。り。護。る。と。敵。も。亦。然。なる。の。利。害。の。前
 より。知。れ。る。べ。い。の。是。を。い。ふ。思。ひ。ぬ。と。向。へ。清。澄。沈。吟。し。て。然。不。咱。も。疑。ひ。あ

とも那人脱落あるべくもあらず館の知をぬらんとのを義成主ら呼ぶ。否
 とも那赤壁の閉戦周瑜が敵の船を焼ける昔操が救ふ冬月(東南の
 風稀)と思ひ故然るを孔明が風を禱り死に羅貫中が演義を戴るも
 陳壽が三國志の風を禱るの事。恐らく那風の偶然も人開き左もれ右
 もあれ毛野の必胎と奪骨を換る奇計あらん。落成を見る如くあつたと論
 去の辰相清澄あると信乃道節莊八現八小文吾等と俱に餘談の
 既びけり。介程大阪毛野胤智大村大角礼儀の俱に野服を編笠を深く考
 伴當才二名をわけて情地白濱の延命寺へ赴けり。あの時、大法師の風
 寒の欠安稍瘥るもの。猶屏坐て方丈在り。毛野大角が館の御使を奉
 了く。来りけりと云え。己ことゆゆ沙弥念成をめて方丈へ迎入る。開き儘わく
 對面を登時毛野の大角と俱に上坐お着ておさす。師父責恙の平安なる後昨日

軍旅の事成就。館の口をさめし。師父の云云と難義を舒てゆ。参りぬ。バ
 猶尊命を傳へ。我御使を参り。一重毒時左右を遠まけぬとのを
 大のちゆて然し。出家人は相応し。軍陣の事。再命も兼る。及
 且左右の人あらず。只這念成の。他腹心の徒。弟る侍り。ともけ。あつた。登
 茶とまわらせよ。といを。念成の。厨の方へ退り。姑且。大角の。あつた。
 師父の未少知。や。那扇谷の管領。我を憎むの故。今番山内。顕定
 主と和睦。且諸侯と連。大軍。水陸。當家。伐。実。是
 危。窮。存。亡。の。秋。入。る。と。館。宵。衣。肝。食。軍。議。暇。も。ま。則。大
 阪。を。軍。師。お。ま。され。大。塚。以下。我。を。使。使。不。做。され。且。師。父。を。請。て。謀。計。を。示
 せ。欲。し。ぬ。お。脚。身。の。欠。安。の。瘥。り。を。流。り。参。り。ぬ。抑。泰。然。る。後。將。行。む。と。る
 後。継。出。家。人。を。と。も。其。國。に。居。て。其。國。の。亡。る。を。外。見。不。忠。不。義。の。罪。免



八代傳心年表三十二

社

○大角



毛野大角
延命寺の方丈造作

八代傳心年表三十二

○大角

るべくも開も亦釋迦の教を欲と詰ると、大いゆあま然我の庸常る家
 人と同かを命の御恩をうまも、兩館の御為、毎々眞福を祈るを我職分
 へべれ、當は潘編小といと雖賢臣勇士を医下りぬ、這回何ぞ人多死如軍
 旅の事、要るを究出家人を然、席へ召きて何れせん、薦る者の死、思
 ひゆるぬ事、とと辭を毛野の推禁、師父いと憚りある言、身只
 其一と知て、其二と知、敵の水戦を言と、數百艘の艦艦を連
 ね渡して、伐ま欲ま、その既、其敵船と相、風と火、あ者、
 然、敵の與、風を起、這、計を、今、師父、外、人、夫、甲、由、目、を
 身、撥、馬、踏、り、舞、て、敵、を、伐、と、課、出、家、人、を、似、け、る、と、推、辭、の
 ふも、理、る、む、只、君、の、為、民、の、為、の、親、を、殊、名、を、隱、敵、を、欺、て、風、を、祈、り、是
 善巧方便也、妄語の一戒と破るふあを、の美を思ひ、と説て、大い沈吟

去て、然、情、由、の、あ、げ、れ、れ、も、風、を、起、て、其、風、所、以、船、を、焼、て、敵、を、亡、さ、す、親
 人と殺す、同、非、如、頭、顛、を、削、り、も、然、殺、生、と、せ、ん、と、固、辭、を、听、さ、り
 去、を、大、角、徐、論、を、す、師、父、の、主、意、何、を、不、看、其、風、を、敵、と、破、る、と、殺、生
 と、嫌、ひ、の、大、敵、利、を、得、て、渡、り、來、て、城、を、拔、け、人、を、屠、り、然、師、父、の、心、單、り、
 自家の士卒千萬名と、自殺、の、同、利害、損、益、の、擧、め、於、て、何、の、道、も
 免、る、が、も、恠、れ、敵、を、害、さ、す、と、御、方、の、戦、ひ、を、助、助、と、其、功、徳、孰、を、其、風、を
 起、す、の、故、敵、を、殺、す、の、嫌、ひ、あ、ら、凱、旋、の、後、水、陸、道、場、の、敵、の、菩、提、を、吊
 ひ、の、飲、ひ、て、皆、清、果、を、得、ん、夫、生、ある、者、の、必、死、あ、り、死、て、活、佛、の、引、道、を、受、ん、と、
 か、こ、る、一、疎、れ、の、千、慮、の、一、失、歟、と、理、り、逼、る、兩、才、子、の、意、見、は、大、い、困、下、果、て、黙
 然、る、と、半、响、許、思、ひ、復、し、ら、ち、領、を、考、る、ん、是、非、及、ま、我、其、弄、計、の、從、て、
 左、も、右、も、ま、げ、れ、も、我、法、力、の、い、ふ、く、風、を、起、を、其、を、よ、く、せ、ん、の、美、什、麼、と、誅、り

向へ毛野の咲々懐より。癡龍の玉と。喜裏の只の出て、大ホ示くのやう。師父先
 是を見ぬひ。ちる裏の妙椿狸児が。風を起去一奇貨ぞ。那癡龍の玉。印是
 ち。然は是をりて招くと。死へ東西南北思ひの随ふ。勁風を起えと。投る素を引く
 より易ら。故の館を乞ちりて。推考来て師父の所用を。我謀る所箇様々々。恁
 恁ふいと。具を説示して又いさう。師父の今宵烏夜は。紛れて悄地大角と。共侶の
 柴濱の推渡り。權且谷山の躰れ住りて。異日件の筆計を。仍ひ勿論當山の衆
 徒の寄隊を。調伏の祈禱の為ふ。二十七日富山の品山屋の龍ると。立て立か多ひ。あ
 餘の準備の箇様々々と。あるるる。癡龍の玉を。遞與せ。又大角の俱額を
 哀め。密山談の目を消しけり。畢竟ある夜、大角が悄地快船。あち乗て俱
 武藏の柴濱の推渡りて。後の話説甚麼を。開へ下回。解分るを聴か。し。
 南總里見八大傳卷之三十二終

○八大傳第九輯下帙下中編乙號上分卷五冊書画印刷目次

出像

柳川重信畫



補助画 卷之三十二末ヨリ

歌川貞秀

淨書 卷之二十九

谷川金次郎

彫工 卷之三十一上

朝倉伊八

卷之三十一下

常盤近吉

卷之三十二

澤金次郎

○曲亭翁新舊著編畧目

書林 文溪堂藏版

八大傳第九輯下帙下乙號下編

分卷六冊當冬推續出版 全部二十冊大團圓に至りし

あはれ新書

中本第一編第二編各三冊○翁の中本の作文化以來久く多しと 本房強て乞求為てふふの作也初編三冊引續近日出版仕

開卷驚奇俠客傳第五輯

作者年々八大傳の著編を餘筆暇るゝの 書中絶の処近日稿成り出版遠く存なるを

菅聖廟画傳記

古人北尾重政画全五冊○この書享和中公羽の舊作より故わると久し刊行せりしと本房求得て新板と近日發行

近世説美少年録第四集

この書も快客傳と同美と云々中絶ありしと多くと促して遠くを出版せんと板近絶在り

著作堂一夕話

是ハ翁の隨筆初集大本三巻近刻○嚮小書目録一席話と考せし者あり誤り之の書名ハ李贄ヲ山中一夕話擬せ凡

玄同放言

瀧澤翁隨筆大本六冊○この書本房の藏板ありより佳紙精製年々小初の書目録小戲号と記せし翁の本意ありと考る因今改之

家傳神女湯

八犬傳九輯下帙の下本編の簡端に作者の自注あり如ちのまゝ用れらるる功ありと考る

精製奇應丸

大包代金茶中黒丸下茶種を考へて世のまじりふふ一丸り考る

熊胆黒丸子

熊胆の功ありと考る

婦人秘傳妙茶

婦人の功ありと考る

製茶本家

四谷まのの町瀧澤氏弘野齋中津南園方多店多と云々

御茶わりの仙

黒油美玄香一頁四十八文

金医救命丸

一粒三十二文本御林氏製弘野江戸小傳町三丁目丁子屋平兵衛

今般賣出の八犬傳九輯下帙の乙號上編四巻の摺紙數九二百二十餘張有之他作の乙號本五巻の紙數字數共三反て多し則分巻五冊の致し乙號の下編十冊も右同様を推續近日又出版仕文漢堂再白

天保十一庚子年春正月吉日發行

書行

京都 大文字屋得五郎

大阪 河内屋茂兵衛

同 河内屋太助

江戸 小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛板

大正九年九月廿三日

大正九年九月廿三日

書目

同	所内呈太	旭
大正	所内呈其共	旭
京港	大文字	旭

大正九年九月廿三日

大正九年九月廿三日

